

池田市立上方落語
資料展示館
「落語ミュージアム」
(池田市)

ザ・見遊じあむ

29

レトロな建物に上方落語の資料がいっぱい
つまった落語ミュージアム



誉館長は桂三枝さん(上方落語協会会長)です。阪急池田駅から駅前のカエマチ通り商店街を抜け、整備された道路の一角に、鉄骨造り2階建て床面積は275平方メートルのちよっとレトロな建物が特徴です。館内は、映像コーナー、展示コーナー、高座など。映像コーナーは4台

タダで上方落語にハマる

池田市は、「池田の猪真い」「池田の牛ほめ」など、しばしば上方落語のネタの舞台に登場する地域として知られています。明治初期には芝居小屋「呉服座」もありました。この地域に、昨年の4月29日、上方落語の資料を常設展示する「落語ミュージアム」が開館しました。名

の大型ディスプレイで「上方落語と池田」「上方落語のネタ」などを上映。展示コーナーでは貴重な写真やポスター、資料を展示。高座はお囃子道具もそろった美しい舞台です。落語会やアマチュア落語家入門講座などを開催しています。2階に上がると資料室になっており、貸し出しカウンター

ミュージアムメモ

▶所在地/〒563-0058 池田市栄本町7-3 ▶休館日/毎週火曜日、年末年始 ▶開館時間/11時~19時 ▶入館料/無料(落語会などは木戸銭が必要です) ▶交通/阪急宝塚線池田駅下車徒歩7分 ▶問い合わせ/072-753-4440

「母べえ」



©2007「母べえ」製作委員会

60余年前の日本の母を描き 現代の家庭を問いかける

日本が日中戦争から太平洋戦争へとつき進む暗黒の時代。1940年から1941年、舞台は東京郊外の親子4人のつましい家庭です。野上家は夫の滋、妻の佳代、長女の初子、次女の照美の4人家族。家族はそれぞれの名前を呼び合うときには「父べえ」「母べえ」「初べえ」と、「べえ」をつけていました。平穩だった暮らしがある日一変します。大学で教職についていた滋が治安維持法違反で検挙されてしまったのです。戦争反対を意思表示しただけで国体に反するとして罰せられてしまう時代でした。「母べえ」

の佳代は、監獄の夫を支えながら2人の娘を育て、家計のために奔走します。そして、時代はアメリカとの戦争へと突入していきます。2006年の『武士の一分』以来の山田洋次監督の作品です。山田洋次監督は「あの絶望的な時代を懸命に生きた人々の、愛にあふれた笑い声や悲しい涙を、そっとスクリーンに写し取りたい。そして、あの戦争で悲しい思いをした人々、さらには今もなお戦禍に苦しむ人たちすべてに想いをはせながら、この作品をつくりたい」と語っています。原作は長年にわたり黒澤明監督のスクリーンライター(監督の横にびったりと貼りつき、撮影行程の全てを把握し、管理・記録する人)をつとめた野上照代さんが、幼い頃の自分の家族の思い出を綴ったノンフィクション。「母べえ」の佳代に吉永小百合ほか「父べえ」の滋に歌舞伎役者の坂東三津五郎が出演しているのも話題です。

大阪自治労連事業本部では一枚700円でチケットをあっせんしています。

このシネマ ガラエイガ

大阪の戦跡を歩く

第28歩

通報艦船 「最上」のマスト

(大阪市北区)



剣先公園にそびえる「最上」のマスト

中之島公園の東端は一般的に「剣先公園」として市民に親しまれています。また、さまざまな労働組合、民主団体の集会場所としても長い歴史を刻んできました。その公園から天神橋につながるあたりに、コンクリートの台座にそびえる1本のマストがあります。ほとんどの市民に知られていませんが、戦前の通報艦船「最上」のマストです。「最上」は日露戦争後の1908年に完成。シベリア沿岸警備などに従事し、1928年に廃艦となりました。翌1929年(昭和4年)、マストとブリッジを在郷軍人会大阪連合海軍部が譲り受け、同地に設置し、大阪市に寄贈したものです。当時の様子を伝える貴重な戦争遺構の1つです。いま京阪電車の中之島新線の開通にともなう中之島公園の改修計画に絡み、大阪市は景観や危険性を考えて、マストの解体や移転などの処置を検討中といっています。

撰津

河内 和泉

反骨のジャーナリスト・宮武外骨

おおさか 三國誌

29

(大阪市 西区)

大阪市西区の土佐堀2丁目交差点の南東角に「宮武外骨ゆかりの地」の碑が建っています。宮武外骨とは、明治後期から昭和にかけて、「反骨のジャーナリスト」として知られた大阪ゆかりの人物です。外骨とは人も驚くような名前ですが、これは本名です。もともと亀四郎という名でしたが、亀は甲羅という外骨をもっていることから、18歳のときに戸籍上の名前も外骨にしたといわれます。



土佐堀2丁目の交差点にある石碑

宮武外骨は1867年(慶応3)2月22日に香川県に生まれ、19歳で上京。20歳で最初の新聞を出版。以降、反骨精神に富み、世相を風刺し、権力の犯罪を告発し、さまざまな新聞、雑誌を創造しましたが、政治や権力批判を行ったためたびたび発禁、差し止め処分を受けました。

1901年(明治34)1月、大阪の京町堀に居を移した宮武外骨は、大阪の新聞・出版界にセンセーションを巻き起こした風刺雑誌『滑稽新聞』を創刊しました。その編集方針は「威武に屈せず、富貴に淫せず、ゆすりもやらず、ハツタリもせず」というもの。権威・権力に対してはまさに体を張って、新聞紙上で、ペンによって自分の主張をたらぬきました。そのため生涯に、入獄4回、罰金15回、発禁処分14回にも及びました。1917年(大正6)には衆議員選挙に「選挙違反告発候補者」として立候補し落選報告会を開催。1923年正月には「忌年始客」と玄関に大書し、虚礼の廃止を主張。また、一方で、社会主義研究の雑誌を発刊したり、民本主義の吉野作造とも親交を深めました。1955年(昭和30)生涯に1000冊を超える刊行物を残し、89歳で破天荒なジャーナリスト人生を終えました。

井戸を掘るなら 水が湧くまで掘れ

石川 理紀之助

明治の「聖皇」とたたえられ、生涯を農村と農民の指導・救済に捧げた石川理紀之助は、1845年2月25日、羽後国秋田郡小泉村(現在の秋田市金足小泉)で生まれました。22歳のとき、力之助を改めて理紀之助に改名。1915年(大正4年)9月8日、71歳で永眠。理紀之助は飢饉に備えて、玄米・麦・ひえなどを貯え残し、その量は3年間もつとといわれていました。「ものごとを決めたら最後までやり抜く」という意味ですが、1月18日の通常国会の冒頭の施政方針演説で、福田康夫首相は、この石川理紀之助の言葉を引用し、「どんな困難があろうとも、あきらめずに全力で結果を出す努力をしていく」と決意を表明しました。

いまも心に響く 名詩・名歌・名語録

冒険とは 生きて帰ること

植村 直巳

植村直巳は1941年2月12日、兵庫県城崎郡日高町(現在の豊岡市)で生まれました。1960年に明治大学農学部に入学生山岳部で登山に没頭。大学卒業後の1966年7月、ヨーロッパアルプスのモンブラン登山、10月にアフリカのキリマンジャロ登山。続いて1968年には南米のアコンカグア登山。日本山岳会の創立65周年事業のエベレスト登山隊で1970年5月11日、エベレストに南東稜から登山。同年8月、北米のマッキンリー単独登山で世界初の五大陸最高峰登山者となりました。しかし、1984年2月16日、冬季のマッキンレーで消息不明となりました。同年4月19日に政府は国民栄誉賞を贈りました。